

令和5年度 嶺北特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程 学習支援 (小学部 低学年)	遊びの指導の時間を中心に、友達や教師と関わる場を積極的に設け、教師間で動画記録を振り返りながら、授業改善を行う。	学部研究で昨年度に引き続き、遊びの指導の時間の動画を撮り、振り返りを行った。友達や教師と関わる場面を取り上げて授業改善を行ったことで児童の成長が見られ、保護者からも高い評価(94.6%)を得られた。ただ、新任の教職員が多く、取り組みに共通理解を持つことが少し不十分だったと考えられる。	引き続き、授業の動画を撮って振り返りを行うことで授業改善に取り組む。また、全児童に対して同じアセスメントを実施し、学部内で児童への理解や発達段階に応じた支援について共通理解を持てるようにする。さらに、クラスや低学年全体で定期的に話し合う時間を設けることで共通理解を深めるようにし、支援の充実を図っていく。
2 教育課程 学習支援 (小学部 高学年)	個に応じた集団(クラス、学年、学部全体など)に参加し、自分の力を発揮できる場を意識して設定するとともに、保護者に通信等で積極的に発信する。	日々の生活や行事で、それぞれの児童に応じた規模の集団の中で適する役割を担う場を設け、その様子を毎回の通信で発信したことで、保護者からも高い評価(満足度100%)を得られた。しかしそれによって児童が自ら力を発揮しようとする場が増えたかについてはまだ十分ではない。	個の実態に応じた集団参加や、活動への意欲を引き出す支援方法を高学年全体で工夫する。また、保護者に通信等で発信するだけでなく、おはようタイムや体育等の学年全体の場で発表する機会を設け、児童の頑張る場を共有し賞賛することで、児童の意欲を高めたり、互いを認め合ったりできるようにする。
3 教育課程 学習支援 (中学部)	様々な集団活動の中で、自ら考えて行動する場面や協力し合う場を設定し、力を発揮できる学習活動を行う。	日々の学習や行事において、生徒一人一人の発達段階や目標に焦点をあてた指導・支援を行ったことで、「集団の一員」としての学習活動を進めることができた。保護者は日常生活面や社会生活面、学習面においてまんべんなく生徒の成長を感じていた。	実態が日々変化する学齢期の生徒に対して、教職員間で話し合いを行いながらその時々での最適な指導・支援を検討、実践していく。また、思いを伝え合う場を適宜設定する。保護者には、日々の様子や成長過程が分かるよう、連絡帳や学部だより、保護者懇談等を通して、丁寧に伝えていく。
4 教育課程 学習支援 (高等部)	卒業後の生活を捉え、社会参加への関心と意欲を高めるために、地域との連携を生かした学習活動(校外での体験、外部講師の招聘等)を積極的に行う。	生徒の希望やアセスメントを通して学習班を編成し、個々の活動設定や支援を丁寧に進めたことで、保護者は基本的な生活習慣面、コミュニケーション面、作業スキル面での成長を感じていた。積極的に校外で活動できる機会を増やし、出前講座や外部講師を招聘しての授業も行ってきた。販売会等での活動では一部の生徒の活躍に限られている様子もあるので、より多くの生徒が活躍できる場に広げられるとよい。	今後も、実態や適性の把握を丁寧に進め、行動観察や生徒とのコミュニケーションを深めながら実践していく。保護者への細やかな情報発信も大事にしたい。現場実習を中心に、外部講師の意見など、第三者からの客観的な評価をもとに生徒が必要な力を吟味し学習内容を厳選する。生徒が社会を知り、触れ合える機会を多く企画していき、関心や意欲の向上につなげたい。
5 健康・安全 (保健部)	児童生徒の発達段階に応じた病気やけが、事故の防止の指導(養護教諭による出前教室等)に取り組む。	日々における児童生徒への丁寧な健康状態の把握や感染症拡大防止への対応など健康管理に気を付けてきた。同時に、視覚支援教材を提供し、保健室や学部・学級における保健・安全の指導や保健だよりを通して情報共有を行ってきたことで、保護者より高い評価(満足度97.0%)を得られた。	今後も、発達段階を考慮した保健・安全指導が行えるように、資料や教材の見直しなどを行い、全校で情報を共有しながら取り組んでいく。また、必要な環境整備を行ったり、ヒヤリハット・アクシデント事例の情報を速やかに共有できるようにしたりして事故防止に努めていく。
6 生徒支援 (指導部) (舎務部)	各学部体育大会や文化祭などの学校行事において、児童生徒の意欲を高めるため、実態に応じた活動内容を創意工夫する。	体育大会は、今年度から平日に学部分散開催をしたことで、各学部の実態に応じた活動内容の設定や学部間交流が可能となった。文化祭では、来校者の混雑を避けるため、学習発表の観覧場所の指定やモニター設置をした。保護者の観覧を人数制限なしで行ったり、教職員が児童生徒の実態を把握し、意欲を持って取り組むことができる内容を工夫したりしたことで、保護者からも高い評価(満足度98.2%)を得られた。	体育大会の学部分散開催は今年度初めての試みであった。今年度の反省点を生かし、児童生徒がより充実した活動ができるよう教職員が見通しを持って取組ができるとよい。 文化祭は、4年ぶりにコロナ前のスケジュールに戻したことで、混雑が一層見られた。来年度はスムーズな運営ができるよう検討し、児童生徒が活動しやすい環境作りに努めたい。
	保護者や学校との連携を密にし、寄宿舎生活における適切な目標や具体的な支援方法を共有する。	寄宿舎生活において、個に応じた目標や支援方法を保護者や担任と共有し実践することで、自立に向けた成長に一定の成果が得られた。しかし、保護者の中には、子が成長しなかったとの評価もあり、真摯に受け止め、さらに支援のあり方を見直す必要がある。(満足度86.3%)	個に応じた支援を実践しているが、我が子の成長を実感できなかった保護者もいたため、今後は保護者との連携を一層深め、子どもの実態を細かく捉えた具体的な目標を立てたり、効果的な支援方法を工夫したりする。子どもの成長の様子を保護者に丁寧に、具体的に伝える機会を増やしていく。
7 進路支援 (進路指導部)	関係機関との連携を通して収集した進路情報を教職員間で共有し、進路説明会や懇談時に積極的に保護者に提供する。	どの学部においても、進路に関する情報提供や共有が行えていたことが伺える。進路関係行事も制限なく行うことができた。保護者に対しては、次の学年や学部そして学校卒業後へと近い将来の生活から進路についてのイメージを持てるような情報提供や取組を工夫する必要がある。	今後は、タイムリーな進路情報の発信を継続するとともに、小学部から高等部までの一貫した進路指導の大切さや、日常的な支援が進路に繋がっていくことについて、保護者や教職員全体に啓発する機会を増やしていく。また、保護者や教職員それぞれの情報のニーズを把握していく必要がある。
8 保護者・地域 との連携 (教務部・渉 外部・情報管 理部)	授業参観や学校行事など保護者の来校機会を定期的に設ける。連絡帳などの日々のやり取りのほか、懇談時のICT機器を活用した情報交換を積極的に行う。	授業参観や学校行事などを制限なく行えるようになり、保護者の来校機会を確保することができた。日々の送迎時や懇談の機会にICT機器を活用し、家庭や福祉サービス事業所と情報共有しながら指導・支援を行ってきたことで、保護者から高い評価(97.0%)を得られた。	次年度も引き続き授業参観や学校行事など、保護者の来校機会を設けていく。懇談時のICT機器を活用した保護者との情報共有はとても有効であるため、今後も継続していく。教職員の「A:十分にできた。」の割合を高めるため、日頃からより積極的にICT機器を活用するよう働きかけていく。